

# 動物衛生研究のあり方

動物衛生研究所長



清水 実嗣

SHIMIZU, Mitsugu

平成15年10月1日に農業技術研究機構は生物系特定産業技術研究推進機構と統合し、農業・生物系特定産業技術研究機構となりました。しかし、動物衛生研究所の組織や業務、運営等に変更はありません。また、同日で動物衛生研究所が独立行政法人となって2年6ヶ月、最初の中期計画の半分が過ぎました。独立行政法人制度では、中期計画の終了ごとに厳格な事後評価を実施し、その結果を組織や業務全般の見直しに反映することが骨子となっています。動物衛生研究所の研究開発、生物学的製剤の製造と配布、病性鑑定、技術講習や研修、普及と広報活動など、主な業務はいずれも高い評価を受けていますが、これからは中期計画の達成と成果の公表および社会還元が従来以上に重要となります。

安全かつ安心な畜産物の生産には動物衛生技術が不可欠であり、動物衛生研究の重要性が益々高まっています。一方、最近の動物衛生問題はきわめて多様化かつ複雑化しており、このような状況に限られた要員で対応するためには、今まで以上に研究課題の重点化と柔軟な組織運営などを考えなければなりません。研究活動では個人の好奇心や熱意が大きな原動力となりますから、個人の発意を育みつつ、動物衛生研究はどう進めたらよいのか、様々なレベルで検討する必要があります。研究のあり方に関連して、以前に元技術会議事務局長の西尾敏彦さんから「ミューラーとニップリング」と題する興味深い話を聞く機会がありましたので、参考までにその概要を紹介します。ミューラーがDDTの殺虫効果を発見したのは1938年

で、奇しくも同じ年にニップリングはラセンウジバエ防除に不妊虫放飼法を提唱、同年は害虫防除にとって記念すべき年となりました。DDTについては短期決戦的に大規模な実用化研究が開始され、早くも1943年には工業化に成功、1948年には害虫防除に対する貢献によりノーベル賞が授与されました。しかし、その後カーソンが「沈黙の春」で化学殺虫剤の負の部分を描き、環境汚染に警鐘を鳴らす端緒となったことは周知の通りです。なお、ミューラーの名誉のために付記すると、彼は原著論文でDDTに潜在する諸問題についても考察しています。一方、ニップリングは細々と息の長い研究を継続、1955年にキューラソウ島でラセンウジバエの実験的根絶に成功し、続いて1961年にはアメリカ東南部、また1991年にはメキシコで根絶を達成しました。彼のアイディアは1972年から沖縄県におけるウリミバエの防除にも導入され、久米島をかわきりに1992年には八重山諸島から根絶、日本は最悪の農業害虫ウリミバエの脅威を回避することができました。これらの業績により、ニップリングは1995年に日本賞を受賞しています。二人の功績は害虫防除ということで共通していますが、両者を比較すると、研究の内容と進め方（短期決戦大規模プロジェクト型と長期現地調査型）成果の社会的影響と波及効果など様々な違いがあります。動物衛生研究はミューラー型とニップリング型のどちらがよいのでしょうか。それぞれに一長一短があり、月並みに過ぎますが両者をバランスよく、また問題によって柔軟に対応しなければと思っています。